

【実施報告】

第 38 回オンラインセミナー

「ドイツ・フライブルクの環境政策」

第 38 回目のセミナーでは、フライブルク市公認講師及びフライブルク市経済観光公社業務代行としてご活躍されている前田成子氏をお迎えし、「環境都市」と名高いフライブルクの環境政策の事例をテーマにご講演いただいた。

セミナーの主な内容について、以下のとおり報告する。

1 概要

- 日 時：2024 年 10 月 16 日（水）18 時 00 分から 19 時 10 分まで（日本時間）
- 当日参加者数：75 名（申込者数：83 名）
- プログラム：①開会挨拶・講師紹介 (18:00～18:05)
②講演 (18:05～18:45)
③質疑応答 (18:45～19:10)

2 講演内容

<フライブルク市の概要・歴史>

○EU・ドイツ行政について

- ・EU が欧州連合法の制定を行い、加盟国に対しての目的達成を求める。ドイツでは環境・自然保護・原子力安全省が国の連邦基本法に基づき環境政策を実施する。自治体に強い自治権が保障されており、環境政策については各自治体の環境保全局が担当ではあるが、各局が包括的な対策を行う。

○フライブルク市について

- ・人口は約 23 万人、面積は 150 km²であり、そのうち森林面積が約 40%、自然景観保護面積が 50%を占める。地理的にはフランス、スイスの国境近くに位置する。産業構造としてはサービス産業が 80%を占める。
- ・フライブルクでは、1972 年からフランス国境沿いの原発建設への反対運動が発生した。ワイン農家、大学の研究者や学生、住民による代替エネルギーの提案があり、原発建設は取りやめとなった。これが、エネルギー問題にとどまらず、あらゆる社会システムについての環境意識の起こりであった。
- ・フライブルクは 1121 年に商業を営む城下町として興った。旧市街地の中心街には小川が流れている。1457 年に設立されたフライブルク大学を中心とした学園都市として知られており、文化を考える学識に裏付けられた政策の決定が行われている。

- ・フライブルクの中心地では、町の中心部における歩行者、自転車、トラム、自転車の共存（交通モビリティミックス）が観察できる。
- ・森の中心地からすぐ行ける距離に森が広がっているのが特徴である。また、北欧諸国の影響で、自然に触れる子供たちを育てる取り組みとして森の幼稚園が市内に10箇所ほど設置されている。
- ・クラインガルテンと呼ばれる長期契約の貸農園が市内の森の裾野に13箇所あり、自然保護の意識形成とその共有体験を提供する、住民参加による緑化政策の実践の場として機能している。
- ・フライブルクはこれまでに町づくり、観光、ジェンダー、サステナビリティ等で計211の表彰を受けており、フライブルクが様々な分野の政策に力を入れていることが見受けられる。
- ・旧市街地は第二次世界大戦時、連合軍の爆撃（1944年11月27日）により90%が破壊されたものの、大聖堂は無事残ったため、戦後町全体が再建された。その際、旧市街地のゾーニング対策が行われ、大聖堂、大学、市役所、オペラ座、中央駅等が中心部にまとまっており、さらにそこをトラムが通過するという町づくりが計画された。

<フライブルクの環境保護政策・交通政策>

○環境保護政策

- ・フライブルク市の環境保護政策は、大気保全政策 エネルギー政策、都市計画、建設政策、交通政策（モビリティ）、廃棄物政策、森林管理政策、水管理政策、自然保護政策、景観保護政策等の幅広い政策によりカバーされている。
- ・5本の指の緑の都市計画と呼ばれる、森林地域保護を考慮に入れた都市計画を行っており、トラムが住宅地域を結んでいる。

○交通政策

- ・フライブルク市では、「ショートウェイの町」をスローガンに、都市計画と交通計画の総合システムに必要なモビリティを効率よく確保し、子供や高齢者が住宅地内で用事が済ませられるようにしている。
- ・交通政策については、公共交通の促進、自動車交通の促進、交通負荷の少ない住宅政策、自動車道の整備、市内外での駐車場料金のメリハリ化の5つの柱をコンセプトに据えている。
- ・トラム利用の促進、パーク・アンド・ライド・システムの導入、レギオカルテ（3つの自治体の統一定期券）導入、低床型トラムの導入等を行った結果、1980年以降、乗客数は右肩上がりであり、環境を視点に置いた交通政策の成功例と言える。

<フライブルク市のエネルギー政策>

- ・環境政策の目標として資源保護、地球温暖化防止、大気汚染物質排出の抑制、脱原発を掲げ、その達成のため省エネ政策、再生可能エネルギー促進、新エネルギー・テクノロジーの利用を行っている。
- ・省エネ構造物の仕様規定は変遷しているが、現在ではパッシブハウス住宅（熱エネルギー消費率 15kwh/m²/a）を採用している。フライブルクでは、世界でも珍しい高層住宅のパッシブ住宅への改修や、ドイツ連邦建築サステナビリティ最優秀賞を受賞した新市役所の建設等の建設プロジェクトを行っている。
- ・市のサステナビリティ政策への住民組織の参画の確保のため、市役所のサステナビリティ管理局と市議会が連携して 2006 年にサステナビリティ評議会が発足した。フライブルク地域の食を考える会、キリスト教教区、フライブルク障害者のための諮問委員会等、様々な主体がメンバーとして参加している。
- ・フライブルク市の電力源は 1993 年には 60%が原子力発電によるものであったが、2012 年には 50%が地域熱によりまかなわれ、原子力発電の割合は 4%まで減少した。なお、ドイツ全体の電力発電は再生可能エネルギーが 6 割以上を占めている。
- ・ドイツでは、新団地造成の時に様々な社会システム問題を総合的に解決している。環境保全を視点に置いた様々な社会システム（自然保護、トラム導入、人口増加による住宅問題、青少年・高齢福祉問題等）の解決を目指している。
- ・2009 年には、フライブルグの経済圏促進協会により、フライブルグ・グリーンシティクラスターが作られ、環境とソーラー経済というテーマで地域の企業や組織のネットワーク化、エネルギー対策、持続可能な都市計画やモビリティコンセプト、環境技術の促進等に取り組んでいる。この取り組みは、地域を強くするクラスターとして BW 州より表彰され、支援を受けた。

3 質疑応答

Q 森の保全に関して、野生の動物による獣害の問題はあるか。

A ドイツでも問題になっており、個体数は管理されている。営林局、州の研究所等が協力し対策を行っているほか、住民も狩猟を行っている。また、一部では柵の設置が行われている。

Q 住民団体参加に関し、それぞれの団体の立場で主張がばらつくこともあるかと思うが、どのようにまとめられているのか。意見は参考としながら、最終的には市長が判断すると割り切っているのか。

A 住民との対話を何度も行い、双方が歩み寄って政策を決定している。サッカー場建設の際は、建設地が自然保護地域であった上、騒音問題が発生することから、住民投票を実施して

建設の可否を決定した。フライブルク市は学生が多いためデモも多く、意見を表明する文化が養成されている。歴史的に住民主体の町づくりが行われている。

Q なぜ住民が能動的に動けるのか。

A 大学が町の中心にあり、誰もが入りやすい空間となっていることから、多くの人が知り合い、実体験を共有する場となっている。

Q 市民・民間の巻き込み方として、フライブルグではクラインガルテンや大学が大きな役割を果たしているのか。

A クラインガルテンは住宅に次いで二つ目の生活の場と言われている。行政による環境政策の推進だけでなく、個人として環境保護に関わり体感することの重要性を個人が理解している。

Q 農薬の使用について、市民の関心は高いのか。

A ドイツ国内には複数の有機農業連盟があり、それぞれに規定が存在する。フライブルク市は有機農業への関心が非常に高く、スーパーマーケットでも有機野菜を購入する人が多い。

Q 財源は国や EU から補助金が出ているのか。

A 補助金はあるが、一つのプロジェクトに対して支給されるのではなく、地域全体がより力を持つことができるようになる開発に対して支給される。例えば、フライブルグのインダストリアル・パークのような取り組みは全国に広がりつつあるが、このような地域開発の条件を満たすような取り組みが補助金支出の決め手となることが多い。

Q 英国では補助金獲得が非常に競争的になっているが、ドイツではどうか。

A ドイツでも補助金の獲得が競争的になった時期があった。フライブルク市では、他地域に先駆けて先進的な事業を実施し、ドイツ全国に影響を与えている点が EU から評価されている。